

## EUの地誌的考察

埼玉県立川口東高等学校 渡辺美久

### 1 はじめに

新しい地理は、現代世界の「系統地理的考察」「地誌的考察」「諸課題の地理的考察」を通して地理的な探求の方法を身につける科目となっている。国際社会に生き、活躍するであろう生徒たちは、メディアから氾濫する地理情報を整理し、理解する能力を身につける必要がある。そのためには、普段から、国際情勢や海外の話題に対し興味を持ち、その地域はどこで、その事象の原因・背景はどうなっているのかなどを的確に把握する訓練をし、判断できる能力を身につけなければならない。地理Bでは、系統地理と地誌は両輪となっているが、地誌の方が、たまたま生徒が興味を持っていたり、知っていることから学習に入っていくやすいので、ここでは、EU<州・大陸規模の地域>の地誌的考察について、考えたい。

### 2 地誌学習の工夫

地誌の授業を行う教師は、どのような姿勢で、地誌学習を進めればよいのか。澁澤文隆氏が留意点としてあげている四点が参考になる。①とりあげる地域に関する地理情報を収集する、②それらを地理的観点から分類、整理して地理的事象、特色を見出し、その原因、因果関係を把握させ、課題を設定させる、③その課題をできるだけ現地に即し諸資料を駆使して追及し、多面的・多角的に分析、考察する、④その結果を地域的特色という観点からまとめ、地図化することである。

本稿では、EUの拡大をテーマに、ヨーロッパの地誌学習を行う場合に、何を留意すべきか考えてみたい。EUという組織やその拡大については、生徒にとって興味を持ちづらい題材である。たま

たま昨年、日本でワールドカップサッカーが行われ、日本人選手がヨーロッパの強豪チームで活躍するなど、サッカーをとおしてヨーロッパの国々や都市が身近になっている。また、女子高校生でもルイヴィトン、プラダなどの高級ブランドから、お洒落な憧れの国であるヨーロッパに関しての関心は高い。そこで、導入として、日本人選手の所属チームや強豪有名チームや、高級ブランドの所在地などをあげさせる。地図上で確認すると、それらが西ヨーロッパの先進資本主義諸国に集中しており、周辺諸国とは一線を画すことがおぼろげながらも感じることができよう。それ以外にも、食品や、自動車などの身近なものを導入の話題として学習に入っていくのがよいだろう。

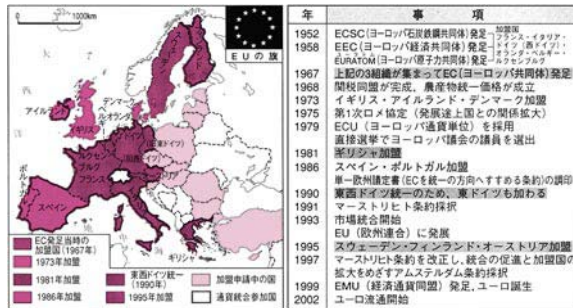
### 3 拡大するEU

従来、ヨーロッパを学習する場合、資本主義陣営の西ヨーロッパを学び、その後には社会主義の東ヨーロッパを学ぶのが一般的であった。ベルリンの壁崩壊に伴う、社会主義の崩壊、資本主義化進展の後も、この傾向は続いた。我々教師側の習慣になっていたからであろう。

東西対立にかわる新しい指標として、EUの拡大による統一の動きを軸にして、ヨーロッパという地域を捉えていくべきであると考え。気候風土の違いにより、従来どおり西（中央）ヨーロッパ、北ヨーロッパ、南ヨーロッパ、それに気候風土だけでなく社会環境の違いによった区別も含めての東ヨーロッパという区分により、ヨーロッパを詳細に学習する必要はある。ギリシャ・ローマ文化、キリスト教を母体とするなど共通点がたくさんあるから、全体像を把握することでさらに地

域的特色の差異も明確になっていくものと考える。

教科書p.184の図①EU加盟国の拡大と(月)EUの歩みを見ると、EUがヨーロッパの中央部から周辺部へ順次拡大していることが容易に読み取れる。今後さらに周辺部に広がることも、ヨーロッパ=EUの一つの地域になろうとしていることも容易に予想できよう。



帝国書院版「新詳地理B 最新版」p.184

東西冷戦の終結後の混乱がようやく終わり、新しい秩序がEU拡大によって作られている。旧共産圏などの新たな加盟を受け入れるEU新基本条約(ニース条約)がアイルランドの批准承認により、発効した。加盟候補112か国の中で交渉が遅れているブルガリアとルーマニアを除く、ポーランドやチェコなど中・東欧、地中海沿岸の10か国の加盟が2004年までに認められるはこびになった。これにより、1989年のベルリンの壁崩壊から13年、東西ヨーロッパの統一が実現し、25か国加盟の統一地域が実現する。残る2か国も2007年までには加盟の見通しで、さらに、トルコまでも加えての統一地域実現も時間の問題になった。

EUの拡大を扱うにあたっては、ヨーロッパ中央部に位置する工業化が進み経済的に豊かな旧EC加盟国と、周辺に位置しその後EC・EUに加盟した国々との位置関係を理解させることが大切である。

EUの産業の中核をなす地域は、南イングラン

ド、ベネルクス三国、ドイツ、スイスを経て北イタリアへ続く地域である。いわゆるブルーバナナと呼ばれる地域である。EUの拡大に伴い、ブルーバナナの南側にもう一つの新しい中心地帯が形成されている。マドリード～バルセロナ～トゥールーズ～リヨン～グルノーブル～ミラノ～ヴェネチアへと続く地帯である。EUの拡大に伴って、人件費等の生産コストが低い地域へ産業の中心が移動するのである。自動車工業は、スペイン・ポルトガルが重要な生産拠点になってきていることも紹介したい。EUの東ヨーロッパ地域への拡大に伴い、必ずや第三の軸が形成されることであろう。南ヨーロッパに比して、さらに生産コストを低く抑えることが可能な地域への、生産活動の移転は容易に予測できるからである。これらの変化を地図を用いて生徒に、考察させ、答えさせたい。

#### 4 終わりに

EUの拡大は良い面ばかりではない。ドイツ・フランス・イギリスなどの大国間の指導権争いや、中小国が大国支配へ反発することも懸念される。東欧の新加盟国から大量の労働力や安い農産物などが流入することで雇用や農業が深刻な打撃を受けるという警戒感も各国国民の間に根強い。イギリス・ドイツでは若者の失業者があふれている。外国人に職を奪われるからとして、外国人の排斥、極右政党の台頭などの問題が発生している。それでもなお拡大をめざす理由が何なのかを考えさせることは、極めて難しいが重要である。大規模な域内市場を持ち、合理的な分業を行い、アメリカ、中国を中心とする東アジアに対抗することを重視する姿勢である。グローバル化と相反する地域主義が同時に進行していることをも触れなくてはならないだろう。そこで、NAFTA、ASEAN、APECなどについても把握させ、EUと対比させておきたい。

参考文献 滝澤文隆編「新地理授業を拓く・創る」古今書院